

E-30 環境にともなう身体と嗜好の変化に関する研究（その1）

昭和女大文家政 ○加藤 澄江
三石 礼子
伊藤喜佐子
外島 幸子
掛塚 芳子

1. 私共は本学学生を対象に、標題の研究のため昨年来いくつかの調査を継続実施しているが、本調査はその一部として行なったもので、同一食品に対する本人ならびに家族の好き嫌いの度合と嫌悪理由について、両者間にみられる傾向と相互の関係から、嗜好を左右する因子をさぐり、さらに寄宿舎における集団生活が嗜好の是正に及ぼす影響のいかんについて「その2」で検討してみたい。

2. 調査対象は本学生生活科学科、食物科学生140名。調査時期は昭和40年12月下旬より41年1月上旬の間、記入法により行なった。内容は日常の食事において使用頻度の比較的高い食品中から52種を選び、大好き5、やや好き4、ふつう3、やや嫌い2、大嫌い1の5段階の尺度と、あらかじめ設定した嫌悪理由の記号を、各食品について本人と家族全員にわたって記入させた。

3. 好みの度合いについては5および4とこたえたものが60%を越える食品として、牛肉、豚肉、牛乳、かに、トマトなどがあげられ、嫌われる食品としては、くじら、にんにく、みょうが、にら、セロリーなどがあり、主なる理由は嗅いである。家族（なかでも両親）との嗜好の関係は食品による差異はあるが、対象の約40%は同一の、また約60%は相反する傾向を示しているが、人間の食物に対する嗜好は、家族のそれと全く無関係ではないと考えられ、とくに母親との間にその要素が大きいものと思われる。